

1999年11月25日

とおるとりえこのハーバード便り

第 二 号

発行人：野村 亨、理英子

住所：# 2, 472 Broadway, Cambridge,
MA. 02138, U.S.A.

電話：1-617-864-1091

〈ブータン・ネパール調査旅行〉

亨は10月30日から11月10日まで京都大学の科研調査でネパールとブータンを訪れました。その前後に数日ずつ日本に立ち寄ったので、ご連絡を差し上げた方には旅行の様子をお話ししましたが、

改めてここに旅行のお話しをしておきましょう。

この調査は京都大学教育学部助教授の友人杉本均氏に誘われて3年前から参加しているものです。3年計画で今年が最終年度になります。去年は母の急逝で参加不可能となってしまうましたが、今年はどうしても行かねばならず、今回ははるばるボストンから参加したというわけです。参加者は私以外はすべて関西の方たちなので関西空港発着でした。往路は香港でネパール航空に乗り換えてカトマンドゥ入りしまし



ネパール、カトマンドゥ、
ボダナート仏塔の前にて、
1999年10月31日

た。ちょうど乾季で気候は申し分なく、ヒマラヤの雪山がよく見えました。ネパールは学生時代から憧れていましたが、なぜか機会がなく、今回初めての訪問となりました。カトマンドゥの町を一日掛けて回りましたが、人いきれと喧噪と物売りや野良犬など、すべてがごっちゃになったインド世界独特のあの混沌とした情景はいつまで見ていても見飽きないものがあります。それに長年聞き慣れたインド英語のアクセントはアメリカと違って肩の力を抜いて聞くことができ、それだけでもほっとします。ヒンドゥーの宗教世界は本当に奥深いものがあり、興味は尽きませんでした。アメリカはまあ住むのはいいけれど、美術館以外は何も見るものがない国ですから、できればこの機会に理英子とネパールを訪れてもいいかな、と思ったくらいです。カトマンドゥにはチベット人の難民センターがあり、チベット人がたくさん住んでいます。ご承知のようにチベットは1959年に中国に侵略されて以来、多くのチベット人がネパールやインドに亡命しています。私もインドにあるチベット亡命政府が建てた学校に学ぶチベット人生徒の里親になっているので、とりわけ関心があり、難民キャンプへ行って絨毯などを買いました。日本のマスコミは悪名高い朝

日新聞を始めとして、みな北京政府に媚びへつらう習性があるので、なるべくチベット問題には触れないようにしていますが、欧米の社会ではチベット問題はかなり関心が高く、ここアメリカでも書店にはダライラマの著書などがたくさん売られています。はやく日本



ネパール、パタンのチベット難民センターにて、
背景はチベット国旗、この国旗がチベット全土に翻
る日が一日も早く実現してもらいたい。
1999年10月31日

の売国マスコミも目が覚めて、チベットの本当の姿を日本の読者に伝えてほしいものです。さてカトマンドゥでは朝4時に起きて、カトマンドゥ盆地を囲む外輪山のひとつナガルコットの丘に登ってヒマラヤに登る御来光を拝んで来ました。6時少し前から少しづつ周囲の雪山が明るくなり、雪の峰峰が一瞬ピンクに染まったかと思うと、日の光がさっと差し染めて、一瞬の内に我々を囲む雪の山々が明るく見渡せるようになりました。その眺めはまさに筆舌に尽くしがたいものがありました。

カトマンドゥを後にした我々はブータン国営のドルック航空の小型機で1時間、狭い谷間に作られたブータン唯一の空港パロ空港に着きました。前回と異なり、今回は気候がよく、秋の初めの信州のような風土と気候で、コスモスが咲き乱れ、遙かかなたには標高7000米のブータンヒマラヤの峰峰が望まれ、すばらしい景色でした。2年ぶりに訪れたブータンはやや交通量が増えたのと、首都ティンブーの町で新しいビルがいくつか出来た位であまり変わってはいませんでした。ここは本当に最後の秘境という名前に相応しく、観光ずれしていない唯一の国です。人々は純朴そのもので、他のアジアと違い値段交渉の必要はほとんどありません。国民はみな敬虔な仏教徒で、犯罪はほとんどなく、桃源郷のような国です。でも面白いことに彼らは自分たちが桃源郷に住んでいるという自覚はないようです。物質的には決して豊かな国ではないし、日本やインド、スイス、イギリスなどから援助を得て建設を進めている国ですが、反面他のアジアの国のように国民が外国に憧れて、やたらに外国かぶれするという事はあまり見られません。ブータンは王国ですが、この王室も政府もまことに真面目で、質素です。日本の援助団体「ICA」の駐在員も国連のUNDPの所長も口を揃えて「この国には汚職はない。援助する側として援助のし甲斐がある国だ。」とっていました。我々の短い滞在の印象でも、上は政府高官から一般庶民に至るまでとても誠実だという印象を得ました。日本のマスコミは王政国家というとすぐに「君主の独裁の元で貧困に呻吟する国民」というステレオタイプなイメージを画きたがりますが、ブータンに関するかぎりはそういうイメージは当てはまりません。それは、名前だけ「民主主義人民共和国」という看板を掲げて、独裁者が国民を愚弄しているどこかの国にこそ相応しいイメージです。

今回の調査では、私はこの国の言語状況を調べるのが主な目的でした。ブータンの国語はゾンカ語というチベット語の方言です。文字はチベット文字で書かれます。しかしこの国

は深い谷で区切られたいくつかの地方から成り立っているうえ、20世紀初頭まで統一王朝がなかったため、言語の統一がなされておらず、いまでも谷ごとに違った言語が話されています。また前近代には、この国の文章語はすべて古典チベット語だったので、各地方の言語が文字に書かれるということがありませんでした。

ゾンカ語も西ブータンのいくつかの地方の地方語であったに過ぎません。したがって現在の状況はまず国語を普及させるという段階なのです。つまり明治初期の日本のような姿だと思えばいいでしょう。

その一方で、この国の学校教育では小学校の段階から英語を入れて二言語併用の教育を行っています。

従ってある意味では日本よりも外国文化を取り入れやすい面もあり、若い世代の伝統分が離れが問題になりつつあります。私はシムトカというところにある高校に3日間通い、ゾンカ語の発音や文字を習い、また発音を録音してきました。またゾンカ語発展委員会という政府機関へ行って資料をもらったり、インタビューをしてきました。現在アメリカでその資料をもとに報告書を執筆しているところです。



ブータンの首都ティンブー、現王宮であるタシチョゾン
の前にて、ここは標高2400米、
1999年11月9日

以上述べたようにブータンは桃源郷のような国ですが、ただひとつ問題は食べ物です。一般にアジアの国は食い道楽の天国ですが、ブータンは例外です。ブータンの料理は世界一辛いという話です。韓国料理も四川料理もかないません。ピーマンぐらい大きなブータンチリを野菜のように一杯入れてジャガイモなどと一緒にチーズで煮込んだものや堅くてかみ切れないヤクの肉のカレーなどです。主食は赤米です。この国にはダシという観念がなく、スープストックも味の素も使いません。味付けは塩だけです。一度一流ホテルで焼きそばを頼んだら、麺を野菜と一緒に炒めただけで何の味もしない焼きそばが出てきました。さすがの私もブータンにだけは振りかけやお茶漬の元、海苔、お茶などをもって行きました。それからここは平均の標高が2500米以上あるので、疲労が溜まると高度障害が出ます。第一回の時は日本出発前に忙しくて向こうで一時寝込んでしまいましたが、今回は疲れていなかったので一日頭痛がしただけですぐ適応出来ました。旅行中はだれも病気やケガにならず収穫の多い旅行でした。しかし私は旅行中歯が取れてしまい、帰りの香港では存分に食べようと思っていたのに、あまり食べられませんでした。その上、こちらに帰国後、また歯が折れてしまいました。こちらの歯科は保険が利かないのと、いまなら航空運賃が安いので、思い切って12月2日から9日までまた東京へ一時帰国して歯の治療をすることにしました。みっともない話ですが、仕方がありません。また東京からお電話

を差し上げるかもしれません。今夕ハーバードスクエアでクリスマスツリーの点火祭があります。まずはお元気で。

(文責：亨)

1999年11月25日



左：ハリウッド、ユニバーサルスタジオ入口にて、2000年1月29日。
右；エジプト象形文字で自分の名前が書かれたお揃いのTシャツを着て記念撮影。ラスベガス、ホテル・ルクソールにて。2000年1月31日